

- 2 統合的複雑性—単純性
- 3 複雑図形の好み—単純図形の好み

VI 認知の好み……………(沢田瑞也)

- 1 概念
- 2 テスト方法
- 3 知的行動との対応
- 4 発達の検討
- 5 教授内容, 方法の差異による認知の好みの変容

VII 認知型と教授・学習法……………(上岡国夫)

- 1 教育セットと教授法
- 2 思考型と教授法
- 3 分析—非分析型と教授方略
- 4 形成された認知型と学習

VIII 総括と展望……………(沢田)

I 場依存型—場独立型

1 概念

この概念は, Witkin と彼の共同研究者による一連の研究の中で明らかにされた。彼らは従事の知覚研究は, 刺激対象, それを含む場の構造, 感覚器官・神経構造等の特性を分析するにとどまっていたと指摘した。そして知覚する主体の全体的心理構成の文脈のもとで知覚過程研究を行う必要性を主張し, 知覚様式と個人の動機や情動との関係及び個々人の知覚様式の違いを明らかにしようとした。

彼らは初めに, 垂直・水平知覚における視覚的要因及び身体位置知覚要因の役割に関する研究を行った(Asch & Witkin, 1948a, 1948b; Witkin & Asch, 1948a, 1948b)。ここで用いた方法は, Rod and Frame test (RFT) である。被験者は暗室内の頭と足の固定された椅子にすわり, 発光塗料の塗られた frame (幅1インチ, 辺の長さ42インチ) と, その中央にある発光塗料の塗られた rod (幅1インチ, 長さ39インチ) とに面する。frame と rod はそれぞれ独立に動き, その傾きは自由に調整できる。被験者は直立または傾いた姿勢で傾いた frame を見, その中央の rod を自分が垂直または水平だと知覚できるように調整するように言われる。この実験の結果, 被験者の知覚する垂直または水平と真の垂直または水平との間にはかなりの誤差があり, この誤差の程度にはっきりとした個人差がみられた。この個人差を分析したところ, 各被験者は, 異なる実験場面でもかなり一貫した傾向をもち, 視覚的場によるか, あるいは身体位置感覚によるかのいずれかの知覚様式で垂直または水平判断を行っており, その知覚様式は誤差の程度に反映

されていると考えた。そして彼らは, 誤差の大きい被験者を場依存型 (Field Dependent) 誤差の小さい被験者を場独立型 (Field Independent) として, 場依存型—場独立型を定義した。

知能, 人格等の多面的領域での関連研究から, Witkin らは人間の心理機能の個人差は分化 (differentiation) の程度によって生ずるものであり, その知覚領域におけるあらわれが場依存型—場独立型と定義された認知型であるとした。つまり, 場依存型は, 分化が十分ではなく, 周囲の状況を比較的全体的形式で経験し, 優勢な場や文脈に影響されやすく, 一方場独立型は, 周囲の状況をより分析的に経験し, 対象を背景から分離して経験する傾向にあるといえる。(Witkin et al, 1962; Witkin et al, 1967)。

また過去の研究との関連を検討し, この認知型は, Thurstone の「閉鎖性の柔軟性」 Guilford の「適応的柔軟性」 Dunker の「機能的固定性」 Wechsler の「知覚的体制化」等の概念と非常に似ていることも報告されている (Witkin et al 1962)。

2 テスト方法

場依存型—場独立型の測定として Witkin ら (1962) は, 次の3種のテストをあげている。

(1) RFT (Rod and Frame Test)

装置は前述のとおりである。テストは各8試行からなる3シリーズである。シリーズ1では, 椅子が左または右に4回ずつ28度傾けられ, frame は, 椅子と同方向に28度傾けられる。rod は, 被験者が垂直または水平だと指摘するまで, 3度きざみで実験者により調整される。シリーズ2では, frame と椅子の傾きは逆方向に, シリーズ3では, 椅子は直立で frame のみが左右に傾けられる。粗得点は各シリーズ8試行における真の垂直または水平からの誤った角度の平均である。各シリーズの粗得点は標準得点に換算され, RFT の全得点は各シリーズの標準得点の平均である。誤差の大きいものが場依存型, 小さいものが場独立型である。

(2) BAT (Body Adjustment Test)

このテストは Titling Room and Titling Chair Tests の一部である。傾きが自由に調整できるようにつりさげられた70×71×69インチの箱型の部屋があり, その中に部屋と独立して傾く椅子がある。テストは各6試行の2シリーズである。シリーズ1では, 部屋が35度椅子が22度同方向に傾けられ, シリーズ2では同じ角度逆方向に傾けられ, 被験者が垂直だと指摘する位置にま

で実験者は椅子を調節する。各シリーズの真の垂直からの誤差の平均値が得点となる誤差の大きいものが場依存型小さいものが場独立型である。

このテストは、RAT (Room Adjustment Test) と対になって行われたが、は後の因子分析の結果から認知適型の当な測度ではないことが明らかになり除外された (Witkin 1967)。

(3) EFT (Embedded Figure Test)

被験者はあらかじめ単純図形を示され、その図形の一部に含んでいる複雑図形 (単純図形の輪郭は複雑図形内のいくつかの下位パターンの境界線である) の中から、その単純図形を見つけ出すという課題である。Witkin らが用いた EFT は、課題を難しくするために、複雑図形は彩色されている。各々ひとつの単純図形を持つ24の複雑図形があり、5分間の制限時間内に見つけ出す。得点は単純図形を見つけるのに要した時間の平均であり、時間の長いものが場依存型、短いものが場独立型である。ただし研究者によっては、2分の制限時間内に正しく解決した課題数を得点としているものもある。

このテストは二次元図形の文脈から項目を取り出す課題であり、(1) (2) のように身体位置感覚を含んではいないが両者との相関も高く、認知型の標準テストである (Witkin et al, 1962)。とくに近年の認知型研究はこれが多く用いられている。

これらの3種のテストのうち実際に多く用いられているのは(1) (3)に限られている。とくに RFT は認知型の中心的テストである。これらの3者の相関は高い (Within et al, 1962) その他、認知型研究の際用いられているテストをあげる。

(4) K-type RFT

Witkin の RFT (W-type RFT) は、大きくて持ち運びが不便、部屋を完全に暗くすることが困難、椅子を傾けたり頭を固定したりすることが困難等で使用が不便なので、加藤 (1965) はその改善のために 25×35×60cm の暗箱を用いるものを考案した。これは被験者の身体全体を傾けず、頭部を本体のあご受けに固定し、本体と共に頭が傾くようになっている。K-type RFT は、W-type との相関及びテスト—再テスト法で高い妥当性と信頼性を示している。

(5) CHEF

Goodenough と Eagle (1963) によつて、EFT を5歳から9歳用に修正したものである。特徴としては、子ども興味をもてるように、複雑図形は有意味図形 (車、人、ボートなど) で、彩色されている。また視覚的に探

すのみでなく、はめこめ式になっており、正しい部分のみがとりだせるようになっている。複雑図形20枚に対し、単純図形は3枚であり反復して用いられる。得点は制限時間内での解決数。

この他、干渉線のある複雑場面から見慣れた図形をとりだす HFT (Hidden Figure Test)、EFT と類似した Gotschaldt Figure Test、異性の全身像を描かせその分化程度から分析する Figure Drawing Test などもある。

3 定安性

Witkin ら (1967) は、分化は心理体系の構造的特性であり、その分化レベルは年齢が増すにつれて高くなるが、一方各年齢集団における個人の分化レベルの相対的位置はかなり安定していると述べている。その結果、この認知型は、各個人でかなり一貫した傾向を示すものと思われる。この点を明らかにするために、8歳から13歳までの5年間、10歳から24歳までの14年間、10歳から17歳までの7年間に渡る縦断的研究を行い、RFT のテスト—再テスト間に有意な相関関係のあることを示した。また、場依存型と場独立型の発達曲線は、テスト得点に差があるので一致はしないが、曲線の形、すなわち発達の型は類似している。この点について Witkin は、各被験者のこの期間の生活環境がかなり安定していたためとも考えられるが、10歳から24歳までの期間における個人の心理発達にもかかわず、各個人の当該年齢集団における分化レベルについてかなり一貫性があると解釈している。

葉やストレス状態における、認知型の安定性の研究も多くある。しかし、飲酒によっても認知型が安定していると結論するもの (Karps ら, 1965; Karps ら, 1966) 飲酒は有意に場依存性を高めると結論するもの (Kristofferson, 1968) があり、一致した結果は得られていない。

この点について Kristafferson は、アルコールによる安定性研究の結果の不一致は縦断的研究が行われるまで結論づけられないと述べている。

また、感覚遮断状態 (SD) での安定性研究が行われている。Jacobson (1966) は、RFT に及ぼす SD の効果を検討し、1時間のSD後、有意に誤りが減少し、また統制群の変化とは有意差があつたことを明らかにした。彼はSD状態で刺激が減少し、そのため内的刺激に対して十分注意を向けるようになり、視覚の手がかりによらず身体位置感覚への注意を増加させた結果だと説明している。同様の結果は、アルコール中毒患者を2群に分け、一方に1時間のSDを行つた研究 (Jacobson, 1968)

また狭く暗い湿度の高い採掘場でかがみこむようにして長期間働いている鉱夫(SD状態)と、広い鉱道の比較的明かるい様々な音が聞える中で歩きまわって短期間作業している鉱夫の2群に、地下に入る前後にRFTを行った研究(Atsrup, 1968)でも示されている。

一方 Hear (1971) は、45分間小部屋の中でひとり視覚・聴覚刺激を過度に与えられ、感覚過剰SO状態の被験者の入室前後のRFTを比較した。場依存型はSOによる意識の変化状態は大きかったが、テスト一再テスト間に有意な差が生じず、SOによっても場依存性は安定していることを報告している。

さらに Elliott (1963) は、場依存型に特別の訓練を行いその効果をみた。傾いた frame によらず身体手がかりの使用を説明する群と、説明の他に feedback を加えた群で、訓練前後の結果を比較したが、後者のみに有意な効果があらわれた。しかしこれも事後テストでは効果がみられず、また訓練前後の結果の相関も高く安定性のあることを示している。

その他、薬物(Karp, 1965; Pollack, 1960)電気ショック(Pollack, 1960)心臓外科手術(Kaidman, 1959)などについても field dependence が影響されないことも示されている。

練習効果については Witkin ら (1971) がまとめており、EFT ははっきりと効果が認められ、BAT は身体が部屋と逆方向に傾けられた場合練習効果があるが、一方RFTは練習効果がみられず安定していると報告している。

4 発達的研究

Witkin (1954) は field dependence の発達の変化について、8歳から10歳までは場依存的傾向が強いが、10歳から13歳までにこの傾向が急激に減少し、13歳から17歳ぐらいで場独立的となるが、成人期にはまた場依存的傾向があらわれてくると概括している。Witkin ら (1967) は認知型分化レベルで捉え発達の変化が当然あらわれると述べているが、多くの研究から一致した傾向が得られている。

Bigelow (1971) は、CEFTを用いて5歳から10歳までの子どもの認知型を研究した。その結果、年少では場依存型であるが年令が増加するにつれて場独立型が増加しており、子どもは5歳から10歳の間に、全体的スタイルへと知覚的に発達してきていると報告している。しかし5歳から6歳の時期でも何人かの子どもは既にかなり高い場独立的傾向を示し、新生児の一般的な知覚的全

体性から分析的スタイルへ移行する最初の分岐点は5歳以前と思われる。また5—6歳から6—7歳への場独立型の増加は小さく統計的にも有意ではないが、7—8歳から8—9歳では急激な増加を示している。同様に Goodenough (1963) は CHEF を6歳から9歳の子どもに行い有意な発達の傾向を見出している。

Witkin ら (1967) は、10歳から24歳までの被験者に縦断的・横断的方法でRFTによる認知型の発達の研究を行った。10—14歳では場依存型への変化が大きいが、14—17歳ではやや変化が減少し、17—24歳ではほとんど変化を示さなくなる。年令の増加につれ場依存型が減少していくのが全体的傾向であるが、変化の割合は年令が増すにつれ減少していく。以上から Witkin らは、平均的な子どもの認知型の発達は17歳までに完了し、知覚機能の心理的分化の発達は青年後期にプラトーに達する傾向があると述べている。

Schwartz & Karp (1967) は、壮年期から老令へ到る場依存型—場独立型の変化を研究した。17歳、30—39歳、58—80歳の3群にBAT, PFT, EFTを行った結果、各テストとも年令と共に有意に場依存型へと移行している。Comalli (1962) は、80—90歳群と25—35歳群とを用いて同様の結果を示したが、同年令の認知型の出現割合をみると、Schwartz & Karp の結果よりも比較的場依存型が多かった。この違いは同じ高令者でも活動的生活をしているか隠居的生活をしているかによる、と仮説だて、Karp (1967) は、60—75歳の高令者を有給職についている群(E群)と、老人施設にいる群(R群)に分け Gottschaldt Figure Test とEFTを行った。そして、F群はR群より有意に場独立型であり、活動レベルが場依存型—場独立型と密接な関係にあることを明らかにした。同様に、Markus (1971) は75—80歳の高令者では、老人クラブに通っている群の方が、施設にいる群と比べ有意に場依存性の傾向のあることを示している。高令者における場依存性減少と活動レベルとの関連を検討することは今後の興味ある領域といえるだろう。

5 眼球運動との関係

Witkin らは、EFTを行うとき、多くの被験者が指または鉛筆で複雑図形の境界線をたどることに気付いた。Conklin (1968) は、これらの追跡行動様式が眼球運動に反映されると考えた。場依存型、場独立型の被験者に、単純な刺激(老人の顔、ボートなど)を示し、そのときの眼球運動を分析した。その結果、高い情報値をもつ手がかりに注目する時間は、場依存型に比べ場独立

型が高いが、凝視時間及び追跡距離については両者に差がなかった。

Burdick (1969), Boesma (1919) は、共に大学生の EFT 遂行中の眼球運動を分析した。Burdick は、分析的知覚する場独立型は、全体的知覚をする場依存型より凝視点が多いと仮定したが、有意な関係はみられなかった。Boesma らは、場独立型は、単純図形と複雑図形とを見比べて分析的アプローチをするので、二図形間の凝視点の移行の数は場依存型より多いだろうと仮定し、支持された。また、場独立型は複雑図形をより長時間凝視する傾向にあったと報告されている。

場独立型と場依存型の違いを視覚的分析の側面から検討するという意味で、眼球運動研究は意味があるだろう。この認知型の違いは凝視点凝視時間の量の差ではなく、情報を多く得られる手がかりを効率的に用いるかどうかといった質的な差によるといった結果が眼球運動の検討から得られている。この点をさらに解明していくことは認知型研究に多くの示唆を与えらると思われる。

6 知能との関係

Witkin ら (1962) は、文脈から項目を分離する能力は、それ自身個人の知能であると考え、知覚的認知型テストと知能テストの関係を検討し有意な関係のあることを示した (Witkin et al 1937, 1962)。同様の結果は、Woerner と Levine (1950), Dickstein (1968) も報告している。しかし一方では、Spatts と Mackler (1967) が大学生に EFT と the Otis Quick Scoring Mental Ability とを行った結果相関のないことを示し、Wachtel (1971) も大学生の EFT と WAIS の結果に相関のないことを示している。

Goodenough (1961) は、WISC の F 位テストと認知型テストとの因子分析的研究の結果、EFT, RFT BAT は、WTSC の積木模様、絵画完成、組み合わせ問題等の分析的知能との相関は高い ($r=0.66$) が、情報理解、単語問題等の言語的知能との相関、算数、数唱、符号問題等の注意集中知能との相関は低いと報告している。同様の結果は、Wachtel (1971)、精神薄弱児を対象とした Witkin (1964) の研究でもみられる。

知能との関係は十分一致した結果が得られていない。Goodenough は WISC の記憶などを含む因子と認知型との関係を明らかにしないと、語知型は知能テストの F 位テストの一部としての意味しかないと指摘している。また Wachtel (1972) は、認知型が知能の測度ではないという指摘にとどまらず、両者のより厳密な関係を検

討する必要性を強調している。Witkin (1964) は精薄児において両者の検討をしたが、一般に知能の低いといわれる子どもの中に、認知型と相関のある分析的能力は高く、認知型と相関の低い言語的能力は低い子どものいることを見出し、子どもの心理機能を理解するためには知能テスト以上に認知型が有効ではないかと述べている。これらの問題点の指摘を中心にさらにこの関係を明らかにしていくことが必要であろう。

7 知的機能との関係

(1) 記憶学習

Witkin (1962) らは、単語記銘、TAT カードの再認について、場独立型は場依存型よりよい成績だと報告している。Kazelskis (1970) は EFT と単語系列暗記学習との関係を検討した。場依存型、場独立型各20名の大学院生に、有意味度 (高一低)、提示様式 (視覚一視聴覚) を変化させて課題を行った。場独立型は場依存型に比べ有意に高い成績を示したが、場独立型は場依存型に比べ、文脈にとらわれずに埋もれ絵を探索するので、文脈効果となる有意味度の低い系列課題でも、高い系列課題同様、よい成績を示すだろうという仮説は支持されなかった。

Messick と Fritzky (1963) は、集団 EFT と視覚学習課題との関係を検討した。この課題は、無意味単語の名前のついた背景を図の組み合わせからなる複雑図形を記銘し、各図形の名前を再生すること、続いて元の複雑図形の一部を変形した図形に適当な名前をつけることを求めている。名前の再生量と EFT には有意な関係はなかったが、変形図形の命名では、場独立型は、場依存型に比べ変形図形の図に注目して名前をつけることにすぐれていた。この課題を用いて Wachtel は EFT との関係 (1968)、RFT との関係 (1971) を検討している。どちらも名前の再生量については Messick らと同様の結果を示したが、変形図形の命名では、図に注目するもの、双方に注目するものの全てについて場独立型の成績がよかった。これらの研究では、一般的記銘については場依存型一場独立型で差がないが、注目点が鍵となる変形図形命名では場独立型がすぐれている。このことは認知型の差は、記銘そのものではなく、刺激の要素を背景から分離する分析的能力によるものと思われる。

一方情動の加わった記銘として、人間の顔の再生に関する研究がある。Witkin ら (1962) は、以前に一目見た人の顔の再認は、場依存型は場独立型よりすぐれてい

る傾向があると述べている, MessickとDamarin (1964)

はEFTと初めて見た人の顔写真の2時間後の記憶との関係を検討し, 結果, EFTと再認量とは有意な相関($r = -.291$ $p < .05$)があり, 場依存型は場独立型より秀れていることを明らかにした. また同様の結果は, 顔の再認 (Crutschfield et al 1958), 他の社会的刺激の偶発的記録 (Fitzgibbons ら, 1965), の研究でも得られている.

抽象的課題や非人間的課題の記録と, 対社会関係を多く含む記録とではその成績が場依存型と場独立型とで逆転しているが, この点について Messick らは, 場依存型は依存したいという社会的動因を満足させるために, 対人的な弁別ではすぐれていると解釈している. また Wachtel は, 人格の側面から, 場独立型は学習そのものに没頭するが, 場依存型は雰囲気, ゼスチャー, 実験者の状況等に影響されるためと考えている. この問題を今後さらに検討することは認知型の特性を知るうえで興味深い.

(2) その他の学習

Schmick Wachtel (1969) は, ランダムに文字を唱える課題を用いた. 課題は遂行に妨害となる4種の言語的刺激条件のもとで行われ, 被験者は課題遂行ののち妨害言語刺激の内容についてテストすると予告された群と予告されない群とに分けられていた. その結果, 全妨害条件のもとで, 唱えた文字のランダム度と認知との間に有意な関係はなかった. しかし予告群の妨害刺激内容の再生成績と認知型とは有意な相関があり($r = .47$ $p < .01$)場独立型になるほど性的な言語刺激内容の理解と再生でよい成績となることを示した. 普通条件及び聴覚的妨害条件のもとで数列記憶テスト, アナグラムテストを行い, その認知型との関係を検討した Houston (1969) は, 両型ともに条件の変化にもかかわらず成績に変化はなかったことを明らかにした. しかし場独立型は場依存型に比べ学習の成績はよかった. これらの結果から, 場依存型は妨害的な条件に影響されやすいのではないかという仮定は否定される.

場独立型は場依存型に比べ学習成績がすぐれているという結果は, 迷路学習を用いた Gorman (1968), Bruner の概念達成課題を用いた Dickstein (1968), 40枚のスライドの法則学習を行った Dargel と Kirk (1971) の研究でも明らかにされている.

しかし Dargel と Kirk (1971) は, 困難度によっては場依存型と場独立型の成績の差がなくなることを報告している. つまり, 場独立型が分析的に学習を行うとし

ても, 非常に難しい課題なら解決ができないだろうし, 逆に非常に容易なら分析する必要もなく解決できるということである. 困難度と認知型の関係は新しい示唆をもっと思われる.

(3) 学業成績

Clark (1968), Houston (1969) は, 大学生で認知型と学業成績の関係を検討し, 共に場独立型は場依存型よりすぐれていることを示している.

Barrett と Thornton (1967) は, 技術者は分析的, 論理的, 多様な側面を抽象する能力を有していることが要求されるから, こうした傾向を持つものは将来技術者になる可能性をもっとして教育し持たないものには断念させる指導ができると考えた. そこでRFTを大学生, 技術者, 一般母集団との間で比較した. その結果, 技術者は大学生より場独立の傾向にあり, 大学生は一般母集団と差がみられず, 以上から彼らは, 技術者の場独立の程度は彼らの有する知覚能力のあらわれと結論している. これに関連して, Brilhart と Brilhart (1971) は, 工学部学生にHFTと Academic Aptitude Examination (AAE)を毎学期末に行った. その結果, 工学部学生の60%以上が高い場独立傾向を示した. しかし, 工学部における進級, 落第をHFT得点で予測することはできず, AAEの方が予測性は高いと述べている.

(4) 創造性

SpottsとMackler (1967) は, 創造性は, 個人が対象物や他の人と出会った際の感覚的な, あるときは不調和さえもたらす過程の中で示す行動だと考え, 一方, 場依存型, 場独立型も個人の外界に対応する様式の差を反映しているから, これら相互に何らかの関係があると仮定した.

Spotts らは, 場依存型は周囲の状況に対して非常に敏感ではあるが, 同時に悩まされもし, 内的経験と外的事態とを効果的に組織化し統合する能力に欠けている, 一方場独立型は内的経験と外的事態とにより一層分節化した注意をし, 経験を分解しそれを新しいパターンに造り直し再構成する能力を有していると考えた. そこから場独立型はより創造的であると仮定した. 彼らは男子学生にEFT, HFT, 創造性テストとしてAsk and Guess Test, Tin Cans Test, Circles Test, Ducoreation Testを行い, その関係を検討し, 全体としては仮説は支持された. しかし流動性, 適切性, 柔軟性, 入念性, 独創性等の下位テスト別にみると有意な差はみられなかった. Mcwhinnie (1967) は, 小学6年生にEFTと創造性テストを行ったが, 独創性とは相関があった($r = .23$ $p < .02$)のみで, 柔軟性, 流動性とは関係がみられな

かった。

しかし、Bloomberg(1967)は、創造的人間は場独立の傾向ではあるが、全ての場独立型が創造的とはいえないことを指摘し、認知型とドグマテイズムの組み合わせが創造性と関係すると考えた。つまり、場独立—低ドグマテイズム型創造的であると仮定した。Ohnmacht (1966)は、場依存—高ドグマテイズム型のみが他の組み合わせと異り、弁別移行学習が非常に困難だったと報告している。この検討のために Ohnmacht (1971)は、HFTとDogmatism Scale とで男女別に4群づくり、遠隔連合テストを行った。結果、男子では場依存—高ドグマテイズム型は有意に低い創造性得点であったが、女子には有意な差がみられなかった。ここでは Bloomberg の仮定はあまり支持されているとはいえない。創造性については一層の研究が必要であろう。

8 人格との関係

Witkin は個人を分化の機能でとらえ、そこから人格と場依存型—場独立型の関係を論じている。彼は人格特性を、1) 環境と個人の関係の仕方、2) 個人の衝動や要求の処理の仕方、3) 自己概念の3点から考察している。彼は青年、成人、子ども、精神病者に、面接、ロールシャッハ、Figuer Drawing 等を試みた結果、各特性に基づいて認知型の人格特徴を以下のように述べている。すなわち、場独立型は、活動的であり、環境からの支持がなくても主導的組織的に機能でき、社会的環境的圧力に対しても抗していける力をもっていること、また自己の内面的生活に注意し、敵対衝動や性衝動の存在を受容しこれらの衝動の効果的な解消や調整を効果的にこなせること、さらに自己については自尊心もあり自分の身体に自信を持ち高度の自己受容が可能なことを特徴としている。一方場依存型は、環境に対して消極的であり支持なしに機能するといった主体的活動が出来ず権威ある者に従う傾向のあること、また内面的生活についての注意も欠如し、攻撃的衝動や性衝動を恐れうまく統制することができず、かなり不安レベル未分化な身体イメージしか持たず自尊心低く自己受容が困難であることを特徴としている。

(1) 性格テストとの関係

これらを具体的に検討するために多くの研究者が、認知型と性格テストの関係を研究している。加藤(1964)は RFT、EFT と性格テスト等を用いた因子分析的研究の結果、認知型は、自立性、支配性、判断の速度、硬さの4次元で関係していることを見出した。Y-G性格検

査とRFTとの関係から、劣等感、客観性欠如、社会的向性、社会的適応に有意な関係があり、場依存型は、劣等感が強く主観的であり協調性に欠け社会的内向といった社会的に望ましくない人格側面と関係している(加藤, 1965a)。Bernreuter Test とRFTの相関の検討は、場依存型は、社交性指導性に欠け、権成主義的であることを示している。しかし場依存性と人格的依存性とは関係がなかった。同様の結果は、対人関係における欲求の強さを見たFIROとRFTの関係からも示されており、場依存型は愛情的側面で他人から何かをされることを好まない。

Ohnmacht (1968)は、Sixteen personality Factor Questionnaire とHFTの関係を検討し、A尺度(暖かさ、社交性)のみが相関があった。場依存型は硬くて冷たく疑い深く臆病で皮肉な敵意をもち厭世的な気質であるといえる。Duke(1969)は、Philosophies of Human Nature Scale とEFTの関係を検討し、認知型と信頼性、利他主義、人間性についての積極的理解に関して低い有意な関係のあることを明らかにしている。つまり場独立型は信頼ができ利他的でありより積極的である。Evans (1967)はMPIのE(向性)尺度と認知型の関係を認めた。Franksの研究では関係がなかったが、Boundの結果、加藤の結果からも、場依存型はより内向的といえよう。これらの結果はWitkinの結果と矛盾しないといえよう。

認知型と不安との関係を検討するために、Taylor Manifest Anxiety とRFT(加藤, 1966)、EFT(Dargel & Kirk, 1971)とを用いたが、両者には関係がみられなかった。Minardは被験者にとって中性・有意味をもつ語を含む構文をタキストスコープで示したときの知覚速度と認知型の関係をみたところ、場依存型は単語が情動的意味をもっているか否かで知覚速度が変化することを見いだした。また、Eagle Linton (Witkin, 1965より)らは場依存型に報告をさせたところ、場独立型よりも忘れることが多かったことを指摘している。こうした結果は場依存型は防衛として抑圧を用いている結果といえよう(Witkin 1965)。

(2) 親子関係

認知型に影響する要因として、子どもと母親との関係があり、母親の養育態度が好ましいとより分化した場独立の傾向にあることをWitkinら(1962)は指摘している。江川(1970)は母親の養育態度と5才児の性格特性を検討したが、母親の養育態度が矛盾型であれば男子は場依存型であり、女子は場独立型であったという。また

加藤(1966)は養育態度とRFTが無関係であると報告している。Dynm(1969)は子どもの認知型は同性の親からの子どもの距離と曲線的関係にあるととして検討したが、父から離れている男子は場依存傾向、適当に母から離れている女子は場独立のいつも父という男子、母から離れている女子とでは後者の方が場独立であることを示している。また Scallan & Herron (1969)は、夜尿症の子どもとその母親に認知型テストを行った。その結果、夜尿症の子どもは場依存傾向にあるのみで母親との関係は見いだせなかった。

養育態度と認知型の関係について一致した見解は得られていない。母親の養育態度がそのまま単純に子どもに反映されることは考えられないので、両者の間に、適当メカニズムを加味して検討することなどが今後研究される必要があるだろう。

9 他の認知型との関係

Denmark Hevlana と Murgatroyd (1971)は、Stroop Color Word Test による柔軟型—固定型と、EFTとRFTによる場依存型—場独立型とは、共に場からある項目をとりだす個人の能力に関係するものと考えて、両者の関係を検討した。結果、SCWテストとEFT、RFTそれぞれについて有意な関係を見出せなかったが、テストの極端値を得た個人についてみると、CWテストとEFTのみは有意な相関($r=0.68$, $p<0.01$)があった。以上か Denmark らは、柔軟型—固定型と場依存型—場独立型とは異なる次元の認知スタイルだと結論している。

Kagan ら (1964)は、分析型とHFTとEFTによる場依存型—場独立型との関係と検討した。その結果、分析型はHFTの成績がよかったが、EFTについては関係がなかった。このことからKagan らの分析的態度は解答の正否を熟考する問題解決ののストラテジーに関係するものであり、場依存型—場独立としての場から項目をとりだす能力とは関係のないと結論した。EFTと分析的態度との無関係性は、小林ら(1972)小林(1972)でも確かめられている。

認知型はあるテストの結果から操作的に定義されたものであるから、テスト間の相関を分析するだけでは各認知型の共通点は十分に考察しきれないと考えられる。概念では共通する点もあるが、テスト結果では有意な相関の生じない原因を検討することは、各認知型の概念をより明確にすることと思われる。

10 今後の課題

以上の研究では次の点が共通して指摘される。場依存型—場独立型の定義は操作的になされたものである。従って、この認知型を他の概念と比較し、その共通部分と固有の部分とを明確にし、概念の整理をすることがまず必要と思われる。しかしこうした点からの認知型研究はやっととりかかられた段階であり、また一致した結果は得られていない。知能指数を個人差の唯一の指標としてきた従来の研究に対して、新しい個人差の指標として認知型を提起する場合、以上の点がとくに重要となると思える。教育現場では個人の特徴としての知能指数が個人の価値を規定するかのように取り扱われることがあり、そのことの弊害は多く指摘されてきている。こうした現実の中では、認知型と知能の関係を明確にしなけをば単なることばの言いかえにしかすぎなくなるだろう。

さらに各々の研究で用いられる認知型はテストを行った集団内での相対的な関係から決定されるものであり、絶対的な位置で決定されたものではない。

以上の留意のうえで、今後の場依存型—場独立型の研究はRFTを用いて技能・運動との関係・学習・人格との関係を検討していくことが必要であるだろう。Witkinら初期の研究者はRFTを用いたが、近年使用が容易であることからEFTが多く用いられている。しかし、RFTは重力に対する身体位置知覚も関係している三次元の知覚様式が反映されており、EFTは二次元の知覚様式の反映である。両者の相関は高いが、しかしRFTは他の認知型テストともEFTとも異なる領域に関係しているように思える。こうした意味から、EFTとRFTの関連を再検討すること共にRFTを中心に認知型研究を進めることが興味深い新しい示唆を与えるのではないと思う。

(伊瀬康子)

II Stroop Color Word Test (SCWT) による認知型

Stroop Color Word test は、色の名づけ (color naming) と色名の読み (Word reading) との連度の違いを、認知の速さと発話へ変換するまでの速さおよび両者の干渉で説明するために考察されたものである。このテストを用いて色と文字という刺激の競合事態での、刺激自体に対する個人の認知様式の差という面と、刺激競合事態にどのように適応していくかという適応様式上の差の2つの性研をもった認知型研究が行なわれている。さらに第3の型として、学習運行におけるパターンの個